清徳の人

――彦坂佳宣先生をお送りする――

「そうそう、そう言えば、そのような教員もいたなあ」と言われるように身を引きたい――これが彦坂佳宣先生から何度も聞いた言葉であった。二〇一一年度をもって本学をご退職になる彦坂先生への感謝の礼儀として「論究日本文学」の記念特集を編むことはもちろん、「立命館文学」、ご退職記念最終講義等々を企画し実施することが専攻主任としての大きな任務と心得ていた。彦坂先生が研究室においでの時に、何気ないお話の合間にこれらのことをそれとなくお伺いしたものの、そのことごとくをご辞退され、先に掲げた言葉で締めくくられるのが常のことであった。長年勤めた大学を去るにあたって、自身の研究業績や学内外における実績を誇示する、あるいは誇示するように仕向けられる研究者もときに見受けられるような風潮のなかにあって、先生はそのまったく正反対の位置に静かに座しておられるように思われたのである。学内外のお仕事も精力的になさりながらも、なおこの一貫した姿勢に接するたびに、「先生はじつに清徳の人と言うべきだなあ」と心の中でひとり繰り返したことであった。

彦坂佳宣氏は本年三月に本学の規程によって定年退職の期を迎えられ、本学名誉教授となられた。本学教学にとってまことに残念なことであり、我々学会員にとっても喪失感は大きい。我々としては長年にわたる先生の御尽瘁に報いるべく、他の学会誌と同様、記念の特集号を編み、その巻頭に先生の御写真や御業績一覧等を掲載することを計画したのであるが、右の次第でこれまた先生の峻拒を受けてしまった。ならばそれに替わる充実した論考を一編でも多

く本号に盛り込むことで、なるべく先生のお考えに沿うようにしたいものだと、「論究日本文学」編集委員会として目論んだ次第である。

彦坂佳宣教授は一九七〇年に愛知教育大学をご卒業後、しばらく高校にお勤めの後、東北大学大学院に進学され、一九七七年三月に博士課程の単位を取得し、退学された。大学院時代には平安時代の和歌の文体研究をなさったが、その後、方言調査に研究の矛先を向けられた。先生のご専門の中心の多くは日本語の方言に関するもので、御著書としては、『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』（和泉書院）、『方言はまほうの言葉！』（アリス館）、『戦後日系カナダ人の歴史と文化』（不二出版）等があり、科学研究費補助金研究成果報告書としても『東海地方方言史に関する地理学的・文献学的総合研究』、『全国方言地図と文献との対照による助詞・助動詞の発達・伝播に関する研究』、『方言文法事象の伝播類型についての地理学的・文献学的研究』などの研究代表として成果を発表されてきた。その集積である学位請求論文「日本語方言史の研究」によって、二〇〇九年九月に東北大学から博士学位を授与されたのである。これらの御事績からもわかるように、彦坂先生の御研究は先生のご出身地である愛知に機軸を置きつつ、そこから日本全体の言語の伝播、方言の諸位相を考察するという壮大かつ精緻な研究方法が展開されているのである。先生は東北大学大学院を終えられた後、九年間、岩手大学教育学部に勤務された後、一九八六年四月に本学文学部に着任された。爾来、今日に至るまで、日本語学に関心を持つ多くの学生・院生を養成・指導され、実業界はもちろん、学界・教育界などにも多くの優れた人材を輩出されたことはここに改めて述べるまでもない。

本学会の恒例の学会行事の一つに「国語教育ゼミナール大会」という年二回の行事がある。本学の卒業生や在学生、それに教員が参加して最近の国語教育の実践報告や研究を発表し、討議しあう会合である。二〇一一年度の冬の大会は高校国語の採用試験に合格した小生のゼミ生の報告を前座とした。午後からの大会なのでその前に食事をとろ

うとこの君と学生食堂に入った。ちょうどその時に彦坂先生がおられたので、ご一緒させてもらいますとお断りして食事を共にした。たまたまこの君が愛知県の出身であることを告げた。すると先生は同郷という親しさを覚えられたのか、いつもとは違ったように、先生の長話が堰を切ったように始まったのである。普段から先生は長話をされるのかと思われるかもしれないが、実際はまったくその逆なのである。ところがこの日は、何と言うか、妙であった。すべてが小生にとって初耳のことばかり。先生の故郷のお家の話、三河と尾張との歴史的確執のこと、学部生であった頃の授業や教員のエピソード、馬術部であった学部生の頃の話、高校教員として着任されたときのこと、大学院に進まれたおりのことなどなど、次々に繰り出される話はどれをとっても興味津津たる話ばかりで、時の経つのも忘れるくらいであった。ただ、いまはこれらを書き綴る場ではないので遠慮しておくが、先生はすぐれた語り手でもあると感じ入ったことであった。今後しばらく先生は本学で授業を持たれる。我々にとってもありがたいことである。

本号を献呈し日本文学会として感謝の微意を捧げ奉ると共に、先生の今日までの御指導御薫陶に報いるべく会員挙って研鑽に励むことをお誓い申しあげるものである。先生の向後の御清栄を祈念したい。

立命館大学日本文学会
会長　中西健治